

## 〈研究ノート〉

## サブカルチャー概念の現状をめぐって\*

難波 功士\*\*

## 【1】問題の所在

2006年春、「扶桑社サブカル<sup>ペーパーバック</sup> PB (英文表記 Fusosha subculture paperback)」の刊行が始まった。少し斜に構えた、ややマニアックな視点から、世の中の妙におかしい物事や、トリヴィアルな「あるあるネタ」を拾い集めた雑誌『SPA!』の連載コーナー。それらをまとめた叢書に対して、「サブカルチャー」の語が冠せられているのである。こうしたサブカル(チャー)の一般的な用法の含意を、ごく大雑把にまとめてしまうならば、「オーセンティックなハイ・カルチャーやひろく一般大衆を対象とするマス・カルチャーとは一線を画した、ある特定の若者(ないし子ども)向けの作品、コンテンツ」といったことになるのだろう。だが、時にはあたかも「若者文化全般≒サブカルチャー」ないし「若者文化≒サブカルチャー」が自明なこととされ、また下位文化という訳語の影響もあってか、「クラシック音楽や純文学、ファイン・アートなどの正統文化・高級文化<sup>ハイ・カルチャー</sup>以外のもの」、すなわち大衆文化(マス・カルチャーないしポピュラー・カルチャー)の同義語としてサブカルチャーの語が用いられることも多い。さらにはいわゆる「オタク系コンテンツ≒サブカルチャー」として、その海外での普及を誇る言説——“Japan cool!”——を近年よく耳にする

一方で、『ユリイカ』の2005年8月臨時増刊号『オタク vs サブカル!』のように、いわゆる渋谷系の流れを引くテイストを「サブカル」と呼ぶ場合もある。いずれにせよ、現在「サブカルチャー」は、なんらかのコンテンツないし作品を指す場合が圧倒的に多いのである<sup>1)</sup>。

しかし、文化を“a whole way of life”と規定するならば、(サブ)カルチャーという概念は、コンテンツだけではなく、そのコンテンツを人々がどう受容し、利用するのか、またその方法<sup>ウェイズ</sup>がいかに人々の間で共有されているのか、という問題群をも包摂してことになる。先に挙げた「サブカルPB」にしても、扶桑社ないし『SPA!』的な視点や感覚を持つであろう読者たちの間に、アドホックであり、より仮想的なものであるにしろ、何らかの共同性が成立しており、緩やかにせよ、そこで何がしかの“ways of life”が分有されていると見なして、それを一個のサブカルチャーとすることも可能である。そして、この伝でいけば、雑誌『Quick Japan』的な太田出版系サブカルチャーや、『relax』『ku:nel』的なマガジンハウス系サブカルチャー、『Studio Voice』的な、『Switch』的な、リトル・モア系の、エンターテイン系系の、さらにはミリオン出版系ないしコアマガジン系のサブカルチャー等々もあり得るだろうし、現に大型書店の「サブカル(チャー)」の棚は、こうした出版社の本で埋め尽くされてい

\*キーワード：サブカルチャー、非通念性、文化研究

\*\*関西学院大学社会学部教授

- 1) 日本のみならず、英米圏においても「サブカルチャー」の語は、「社会学者の工具箱からの、広範に受容され、一般的に適用可能な概念もしくは分析的ツールとして、中立的な評価を得るには至っていない」(Jenks, 2005: 129)し、「抽象的な理論的モデルとしての、サブカルチャーの伝統的な社会学的意味と、ヴァナキユラーな文脈におけるサブカルチャーの語の日常的な使用との間に、乖離が拡がっている」(Bennett, 2004: 167)という現状にある。また、宮沢章夫は、「サブカル」はハイカルチャーに対する「サブ」ではなく、「[サブカル]というひとつのジャンルとしか言いようがない」と述べている(宮沢, 2006: 156)。

る。要するに、コンテンツとしてのサブカル(チャー)に対するファン・カルチャー (fan culture) であるところの、「サブカル(チャー・ファンダム)・サブカルチャーズ」も想定可能なのである<sup>2)</sup>。

こうした混沌とした状況を整序すべく、本稿では、社会学やカルチュラル・スタディーズでの「サブカルチャー(ズ)」をめぐる議論を再検討しながら、これまでの研究の蓄積を活かしつつ、かつ現在の日本社会でのフォーク・ユースを無視しないかたちでの、「サブカルチャー」概念の再措定を試みていきたい。

## 【2】何に対する「サブ」なのか

そもそも「サブカルチャー」という言葉は、1940年代にアメリカで社会学者によって造語され、まずは学術用語として、後に日常の用語として広まっていった(Gordon, 1947→1970)。だが、サブカルチャー研究の淵源は、そこからさらに時間を遡り、いわゆるシカゴ学派のエスノグラフィに求められることが多い(Gelder & Thornton, 1997; Kidd, 2002; Gelder, 2005)。急速に成長する都市シカゴに移り住んできた人々のエスニックな、もしくはレイシャルなコミュニティの中でシェアされる文化、ストリートに屯する非行少年たちの、雇われパートナーとして社交

ダンス場で働く女性たちの、さらにはシカゴの「寄せ場」や「野营地」に流れ着き、また流れ去る「渡り労働者(hobo)」たちの文化…。それらを描いた瑞々しいモノグラフ群が、社会学におけるサブカルチャー研究の原像だと、とりあえずは言えるだろう。そして、戦後イギリスにおいては、アメリカ都市社会学のサブカルチャー研究の持つ、行政管理のないし社会改良主義的な色彩に抗して、いわゆるカルチュラル・スタディーズの研究が登場し、労働者階級コミュニティから析出されてきた50年代のテッズ、60年代のモッズとロッカーズ、70年代のスキンヘッズやパンクスなどが俎上に上げられていく。しかし残念なことに、こうした研究の系譜は、現在の日本においてはごく少数の社会学者が、都市や逸脱などをめぐる「下位文化」研究として衣鉢を継ぐにとどまっている。また戦後の日本社会において、イギリスのユース・サブカルチャーズに対応するような存在は、「〇〇族」と呼ばれた若者諸集団であろうが(馬淵, 1989; アクロス編集室, 1995; 千村, 1996; 成実, 2000; 日高, 2006)、それらに対する社会学的な研究は、そのリアルタイムにおいても、かつ歴史(社会)学的にもじゅうぶんになされてきたとは言い難い<sup>3)</sup>。

その一方で、前述のように、今日の日本社会において「サブカル(チャー)」の語は、ごく日常的に用いられている。たとえば

- 2) 1960年代、当時の若者文化、とりわけ対抗文化とほぼ等しいものとして「サブカルチャー」の語が輸入され、やがて70年代に「サブカルチャー」の呼称は、「ヤング」の好むコンテンツ全般へと拡散していった。『現代用語の基礎知識』(自由国民社)の1972~75年版には「サブカルチャー」の表記で、1976~82年版には「サブカルチャー」の表記で外来語集にあり、1983年版において次のように項目化されている。「下位文化。副文化。部分文化。最近の若者雑誌の一傾向に当てはめられる言葉だが、もともとは社会学的概念。伝統的文化とは一線を画しながら、独自性をもった新生の文化である。雑誌の領域では、総合雑誌の固定化した形式とは違って、軽く娯楽雑誌風でありながら本質的なものに触れ、知的な洗練性を求める現代青年の好尚に合って迎えられている。「ブルータス」、「ビックリハウス」、「ホット・ドッグ・プレス」、「プレイボーイ」などをその例に挙げる者もある」。また宮台真司は、『サブカル真論』と題した本の中で「みなさんが「サブカル」と略語を口にするときには八〇年代のイメージがどこかにあるはずです」(宮台, 2005: 125)と述べている。たしかに「(YMOなど)テクノポップというものが音楽のあるひとつのアレンジ法を越えてサブカルチャーの文脈で展開していったことだ。その社会現象的ムードを一言で説明することは到底無理であり、ニューアカ、スネークマンショー、デザイナーズブランド、MANZAI、アルファ YEN レーベル、ピテカン、TRA、テクノカット、宝島などのさまざまなキーワードが当時の状況を鮮烈に思い出させるのみ」(山口, 1996: 144)といった記述に見られるように、サブカルチャーを80年代初頭の、東京を中心とした思想的・文化的なトレンドに限定する用法も可能であろう。
- 3) 1996年4月号『東京人』11-4(103)の特集「東京モード・ファイル」やオリベ出版部編『日本のレトロ1920-70スタイルブック』織部企画(出版年不詳)、1997年に東京国際フォーラムで開かれた「東京ストリート・スタイル展」図録をなど参照。

「オタク」という言葉を知らない人はいないだろう。それはひとこと言えば、コミック、アニメ、ゲーム、パーソナル・コンピュータ、SF、特撮、フィギュアそのほか、たがいに深く結びついた一群のサブカルチャーに耽溺する人々の総称である。本書では、この一群のサブカルチャーを「オタク系文化」と呼んでいる」（東，2001：8）

もちろん東浩紀は、クラシック音楽や古典芸能、ファイン・アート、純文学などの高級文化のみを文化とする頑迷さからは無縁である。また、「オタク系文化」のみが、サブカルチャーであるともしていない。しかし、その（サブ）カルチャー観は、ある表現の形式にのっとり、パッケージングされた何らかのコンテンツこそが文化であるという、作品至上主義の呪縛からは自由ではない。さらに言えば、ある「芸術や知的な作品」（ないし東の言う「一群のサブカルチャー」）の創作・批評・消費などをめぐるウェイズ・オブ・ライフは、それとは無関係な日々の営みよりも価値のある、「文化」の名に値する行いであり、そうした「芸術や知的な作品」の生産・流通に関わる人間は、それ以外の人々よりも意義のある存在であることが、暗黙の前提とされているのではないだろうか。

では、ウェイ・オブ・ライフの総体という最広義の文化概念を選択し、かつすべての諸文化間に、さしあたり優劣や正邪の別を設けない、という本稿の立場からは、いかなる「サブカルチャー」概念が措定されるべきだろうか。サブカルチャーは、「サブ」カルチャーである以上、なんらかの文化との関係性において定義されるものである。これまでの議論を、サブカルチャーという語が、いかなるカルチャーと対応し、随伴する概念として想定されているのかという視点から概観

すると、以下の四つのパターンに整理可能である。

- (a) <sup>アッパー・カルチャー</sup>上位文化に対するサブカルチャー。より正統ないし高級な文化とは、並列には語りえないものとしてのサブカルチャー。「サブカルチャーの“サブ”は“下”という意味の接頭辞がそもそもなのである」（橋本，1987：30）。
- (b) <sup>トータル・カルチャー</sup>全体文化に対するサブカルチャー。たとえば、国民文化（もしくは文化）の部分となすものとしてエスニック・サブカルチャーズを論じたミルトン・ゴードンや（Gordon, 1964=2000）、60年代の若者文化をより大きな社会に対するサブカルチャーとして論じたピーター・バーガーらなど（Berger & Berger, 1972=1979）。
- (c) <sup>メイン・カルチャー</sup>主流文化に対するサブカルチャー。たとえば、「サブカルチャーというからには、それに対立するメインカルチャーがなければならない」（小川，1999：4）<sup>4)</sup>。
- (d) <sup>コンヴェンショナル・カルチャー</sup>通念的文化に対するサブカルチャー。たとえば、「サブカルチャーズ研究は、法的なプロセスの研究と統合される必要がある。刑法の諸規範とは、人々が「通念的文化」や「<sup>ドミナント・カルチャー</sup>支配的文化」または単に「文化」に言及するとき、脳裏に思い描くものである」（Cressey, 1970：VI）<sup>5)</sup>。

(a) に従った場合、当然「誰が、何の権限によって、その文化を上位／下位、正統／異端、高級／低級と判断するのか」という問題に直面する。アプリアリに、本質的に上位（正統・高級）な文化が存在すのではなく、さまざまな諸文化の相関の中から、当該社会において上位とされる文化が、その姿を現してくるのである。また本稿の

4) この小川論文が掲載された雑誌の特集「新たなソフトの脈脈を探る：サブカルチャーの逆襲」において、大月隆寛は「「サブ」というからにはそれに対応する「メイン」がどこかに想定されなければならない。映画その他が「サブ」だったら「メイン」はなんだ、という、それはやはり「活字」の領域ということになるのでしょうか。…「サブカル」とはかつての視聴覚文化といったもの言いにも親しい響きを持っています」（大月，1999：10-1）と述べている。だが本稿は、サブカルチャー研究≡ヴィジュアル・カルチャー研究という立場を採るものでもない。

5) 他にもたとえば、マイケル・ブレイクの著作は（Brake, 1985）、「80年代のカナダの経済的低落によって、仕事や学校を通じて発展する文化的資源を欠いた若者は、境界化され、「非通念的」（たとえばサブカルチュラル）になり、時には逸脱的娯楽を追求すると論じた」（Wilson, 2006：18）といった用法や、「スケートボーダーたちは、自己同定的な外見と価値観が、通念的な行動のコードと対峙するところの、彼ら自身のサブカルチャーを創造する」（Borden, 2001：137）など。

立場は、たとえそれがステータスが高いものとされ、なんらかの威信<sup>プレステージ</sup>を有し、エリートと目される人々の間に共有された文化であったとしても、当該社会の一部の人たちによって担われており、一般的ではないと見なされているのならば、それも一種のサブカルチャーとする、というものである<sup>6)</sup>。

一方 (b) ならば、サブカルチャー間に優劣、上下の関係を設定しないことも可能である。しかし、全体文化とその部分文化<sup>パーシャル・カルチャー</sup>としてのサブカルチャーとの関係は、まったく対等なものとは言えないだろう。あえてあるサブカルチャーズを括る全体文化を考える以上、そのサブカルチャーズ間になんらの共通項も想定されていないとは考えにくい。まったく重なるところのないサブカルチャーズ、その単純な総和として全体文化を考えることは不可能ではないが、意味ある行為<sup>ア・プリオリ</sup>だとは思えない。要するに (b) の場合には、先験的になんらかの全体性が想定されており、そこに包摂されるサブカルチャーズには、あたかもそのOSにあたるような文化——個々のアプリケーション・ソフトに相当するサブカルチャーを動かすための——が前提とされ、かつそれが実体視 (reification) されているのである。そうした全体文化とは、個々のサブカルチャーの偏差を超えて存在する、いわば当該社会における大文字の Culture なのである<sup>7)</sup>。

では、(c) の場合はどうだろうか。この立場からならば、何がメインであり、何がセンターに位置するかは、さまざまな文化間の相互作用の過程を通じて、その社会、その時代によって変化し得るものである、という視座が開けてくる<sup>8)</sup>。そして、ある文化に対する優劣・正邪などの価値判断を排し、それら諸文化の相関の過程を通じて、どのような文化が、どのようにして主流 (もしくは傍流) ないし中心 (もしくは周縁) のものとなっているかを、分析・記述する道が開けてくる。ただしこの場合、「主流—傍流」「中心—周縁」の二項対立において、諸文化は輻輳ないし拮抗するものである、ということが自明な前提とされている。イギリスのカルチュラル・スタディーズが採った、「抵抗」ないし「対抗」をメルクマールとする (ユース) サブカルチャーズ観には、これまでさまざまな立場から、さまざまな批判が加えられており、その成員たちに「なんらかへのアンチであること」が当初より自覚されていたサブカルチャーよりも、当事者たちの実践の過程で「当該社会への何らかのアンチとして事後的に結果する」サブカルチャーの方が、はるかに多いことが指摘されてきている。「ポスト・サブカルチャーズ」研究を主張する論者らが言うように、ピエール・ブルデューの “pratique” (実践) や ジュディス・バトラーの “performativity” (行為遂行性) といった概念の洗礼を経た現在 (Weinzierl

- 6) サブカルチャーを論じるとき、“subterranean” “subordinate” “subaltern” “subversive” といったニュアンスからは自由となりえないのが常であるが、社会学の伝統において下位文化研究は、決して若者やアウトサイダーのみを対象としてきたわけではない (前島, 2001など)。「(a)「支配的文化」の文脈の外に先行してあった、もしくはそこで形作られたもの。たとえば、ホスト・カルチャーの中で「サブカルチャーズ」となっていった移民グループの「文化」、もしくは、包括する支配的文化に先行して存在し、それと共存し、もしくは吸収され、もしくは反発する地域的なサブカルチャー。(b) 支配的文化の文脈の中に発生するもの。これには以下の二つのサブカテゴリーがある。(I) 社会的文化的構造の要求に対してポジティブに反応して出現するもの。たとえば、職業的サブカルチャーズ、年齢集团的サブカルチャーズ、(II) 社会的文化的構造の要求に対してネガティブに反応して出現するもの。たとえば、非行サブカルチャーズ、宗教的な再生降臨派サブカルチャーズ、政治的過激派サブカルチャーズ」(Downes, 1966: 9)。この (b) の (I) の中には、ステータスが高いとされる人々によるサブカルチャーも存在しうる。
- 7) この立場に対しては、今日、果たして何らかの全体文化を想定できるのだろうか、という疑問が生じてくる。たとえば、フランスのラッパーたちの場合、その人々の文化がどの全体文化の中に位置づけられるのか——フランス国民文化、もしくは世界的なアンダークラス文化、アフロアメリカン文化、移民文化等々——は、けっして一意に決まるものではない (陣野, 2006)。
- 8) サラ・ソートンによれば、「主流 (the mainstreams) 対傍流 (the alternatives)」の構図をめぐるのは、それを「支配的文化とブルジョアジー・イデオロギー対サブカルチャー・逸脱的前衛」ととらえる伝統的パーミンガム学派やディック・ヘブディジ、「マス・カルチャーと商業的イデオロギー対サブカルチャー・逸脱的前衛」ととらえるアンジェラ・マクロビーら、「マス・カルチャーと商業的イデオロギー対学生文化・教育を受けた前衛」ととらえるサイモン・フリスら、といった相違が見られるという (Thornton, 1995: 96-7)。

& Muggleton, 2003: 11)、何らかの主流文化なり中心文化とは、先験的に存在するものとして実体視されるべきものではなく、傍流ないし周縁的な文化の存在が浮上することによって、再帰的に立ち現れてくると考えられるべきものではないだろうか。

ゆえに本稿のとする立場は (d) となるが、ここで言う通念的文化と「非通念的文化としてのサブカルチャー」との関係は、実体としてある二つの文化が対峙しているという構図においてではなく、いわば「図」と「地」の関係として語られるべきものである。この場合、図にあたるのは何らかのサブカルチャー——その社会において、ある人々にとって異物として認識され、あえて名指さざるを得ないウェイズ・オブ・ライフのまとまり——であり、その文化のあり様が、当該社会において際立ち (salient)、有徴である (marked) ことによって、逆にその社会における通念や常識といったものが照射され、「地」として認識可能なものとなってくる。まず判然とした通念的文化があり、それへの対抗としてサブカルチャーが登場するというのではなく、サブカルチャーがその社会において名付け、語るべき何ものかとして意識され、時には社会問題視され、その像が結ばれてくると相即的に、通念的文化もその姿を浮かび上がらせてくるのである。あるサブカルチャーの出現によって、そのサブカルチャーを「サブ」カルチャーたらしめている通念的文化は、事後的にその存在が意識されるのであり、またその一方で、モラル・パニック論の指摘したように、当該社会における通念的文化のリアクションによってのみ、あるサブカルチャーはその輪郭を現し得るのである。

たとえば、60年代のアメリカにおいて中産階級子弟・子女が担い手となり、震源となった

カウンター・カルチャー

対抗文化の場合も<sup>9)</sup>、その一個のサブカルチャーとしての顕現によって、身ぎれいで健康的なウェイズ・オブ・ライフが標準であり、リスベクタブルなものだとされてきたことが (奥村, 1998)、人々の意識に上ようになっていった。つまり対抗文化との関係性の中で、そうしたゴールデン・エイジのアメリカ中産階級文化は、あたかも空気のように社会を覆う存在であったことが、改めて同定されていったのである。一方、同時期、ブラック・カルチャーのある部分は、白人が黒人に優越していることを暗黙の前提としたウェイズ・オブ・ライフと闘争していた。この場合の通念的文化を白人文化と呼び、基本的には白人種以外の担い手は存在しない文化だとしておくと、先の中産階級文化が「名誉白人化したアジア系の人々など (時には一部黒人)」にも共有されたものである以上、「中産階級文化≠白人文化」ということになる<sup>10)</sup>。このように通念的文化は、あらかじめ一意に想定されうるようなものではなく、サブカルチャーズとの相関によって左右される、状況依存的な存在である点で、(b)の全体文化とは似て非なるものである。60年代アメリカの例を続けるならば、中産階級文化+対抗文化+黒人文化+白人文化+南部文化+北部文化…と、いくら足しあげていったところで、その総和は、ミルトン・ゴードンの想定したアメリカ国民文化という全体へは達し得ないであろう。「さまざまな偏差は含みつつもアメリカ国内の諸文化には共通する基盤となるもの (=全体文化) がある」という思考法 (とそれに基づく諸実践) も、ビートニクスやヒッピーたちの東洋志向や、一部のブラック・カルチャーのアフリカ回帰志向、さらにはネイティヴ・アメリカンたちの「アメリカ以前」志向など、反ないし脱アメリカ的サブカルチャーズに逆照射されることで浮き彫りとされ

9) サブカルチャーとカウンターカルチャーの間に一線を画す定義の仕方もあるが (Certeau, 1980=1990; 青木, 1989; 高田, 1994)、本稿では「サブカルチャー⇔カウンターカルチャー」としたい。ミルトン・インジャーは、サブカルチャーの用例を集め、原基文化、より大きな社会の部分文化、より大きな社会への対抗文化の三つに類型化し、この三番目を特に“contraculture”と呼ぶことを提言したが (Yinger, 1960)、このコントラカルチャー以外にも、アンダーグラウンド・カルチャーやフリンジ・カルチャー、“covert culture” (Kadrey, 1993) や “alt. culture” (Daly & Wice, 1995=1997) といった用語もある。これらもすべて、本稿の採る最広義でのサブカルチャー概念に包摂され得るであろう。

10) この場合の白人文化は、いわゆる WASP のみならず、プア・ホワイトやレッド・ネック (白人労働者階級) の文化をも包含している。

た、一個の通念的文化なのである。

本研究では、(d)の立場によりつつ、多岐にわたるサブカルチャーをめぐる、長年の議論を編んだ最新のリーディングスの冒頭に掲げられた、「サブカルチャーズは、その特異な関心と実践を通じて、またそれらが何をどこですのか、何であるのかを通じて、なんらかの無規範的かつ／もしくは境界的なものとして表象される人々の集団である」(Gelder, 2005:1)という包括的な定義を踏襲しつつ、「無規範的かつ／もしくは境界的(本稿での言い方では、非通念的かつ／もしくは非支配的)なものとして表象される人々の集団を、なんらかのまとまりを持つ集団たらしめている、そこで共有されているウエイズ・オブ・ライフ」をサブカルチャーと呼んでおきたい<sup>11)</sup>。いずれにせよ、本稿の立場からすれば、サブカルチャーを研究するということは単に何らかのコンテンツを分析することでも、それを作品として語ることもなく、コンテンツ(の受容や使用)を含めた人々の実践を研究することであり、それが「サブ」であるゆえんをその「非通念性(unconventionality)」に求めるというものである<sup>12)</sup>。

### 【3】おわりに

サブカルチャーの担い手を若者や、一般にアンダー・ドッグとされる人々にのみ求めないという本稿の立場からすれば、2003年の竣工以来、メディアを賑わせてきた「六本木ヒルズ族」——と呼ばれる人々の間に共有されている(と人々に

よって認識されてきた)何ものか——も、一つのサブカルチャーということになる。90年代以降、「〇〇族」の呼称は、暴走族を始め、バイクやクルマ関連の逸脱集団(文化)をもっぱら指示するようになっており、何らかのサブカルチュラルな共同性は、ゆるやかな「～系」のまとまりとして言及されることが一般的であった(難波, 2005)。それにも関わらず、あえて彼のIT長者や金融エリートたちを「～族」と呼ぶ言い方が定着した背後には、やはり彼らの手法が、すぐには通念的なものとなりえないであろうという暗黙の了解、さらにもっといえば当該社会の規範からは逸脱しているのではないかという密かな疑念を、世間の側が持っていたからのように思われる。時代の寵児ともてはやされ、すっかりテレビ・タレントとしてお茶の間に受容され、定着したかにみえた経営者の逮捕劇は、彼らを「〇〇族」呼ばわりし、当該社会のあくまでも「サブ」に位置づけ、有微な存在と見なし、もっと言えばスティグマタイズしてきた「世間の狡知」が、それこそ事後的に再認識された出来事であったように思われる。

### 参考文献

- アクロス編集室編 1995『ストリートファッション 1945-1995』パルコ出版  
 青木秀男 1989『寄せ場労働者の生と死』明石書店  
 東浩紀 2001『動物化するポストモダン：オタクから見た日本社会』講談社現代新書  
 Bennett, Andy 2004 *Virtual subculture?: youth, identity and the Internet*, Bennett, A. & Kahn-Harris, K. (eds.) *After subculture: critical studies in contemporary youth culture*, Palgrave

- 11) こうした立場は、フィル・コーエンらイギリスのカルチュラル・スタディーズの流れからすれば、一見、文化を取り巻く権力関係への無頓着と捉えられかねないことは承知の上である。本稿の立場は、以下の引用にあるような「支配的文化／被支配的文化」の二項対立の図式とは異なる。「私の視点からすれば、サブカルチャーズは被支配文化から生まれるのであって、支配的文化からは生まれない以上、中産階級はサブカルチャーズを生み出さないと考える」(Cohen, 1980:85-6)。その時代や社会における日常知・背景知からの背反、すなわち「非通念性」をサブカルチャーのメルクマールとした場合、自身が「一般ピープル(略してパンピー)」とは違うことにステイタスを感じていた、80年代の日本版ヤッピー「ヤンエグ」や90年代の「シャネラー(など特定ブランドのファン・カルチャー)」等の、より享乐的な消費文化のありようも、当然一種のサブカルチャーということになってくる。「現在の消費者文化において、人々は自身を社会的な構成によってではなく、自身の生活に意味を与える活動・モノ(objects)・関係といった観点から定義している。社会における自身の位置を具体化するのにはモノ、とりわけ商品グッズであり、それらを通じてわれわれは他の人々と関係し、価値や関心の分有を確認しあっている」(Schouten & McAlexander, 1995:59)。
- 12) こうしたサブカルチャー観は、都市社会学における下位文化論、とくにクロード・フィッシャーのそれに多くを負っている(Fischer, 1975=1983)。

- Berger, P. & Berger, B. 1972 *Sociology: a biographical approach*, =1979 安江孝司ほか訳『バーガー社会学』学習研究社
- Borden, Iain 2001 *Skateboarding, space and city*, Berg = 2006 斎藤雅子ほか訳『スケートボーディング、空間、都市』新曜社
- Brake, Michael 1985 *Comparative youth culture*, Routledge
- Certeau, Michel de 1980 *Art de faire*, =1987 山田登世子訳『日常の実践のポイエティック』国文社
- 千村典生 1996『時代の気分を読む：ヤングファッションの50年』グリーンアロー出版社
- Cohen, Phil 1980 Subcultural conflict and working-class community, Stuart, Hall et al. (eds) *Culture, media, language*, Hutchinson
- Cressey, Donald 1970 Foreword, Arnold, David (ed.) *Subcultures*, The Glendessary press
- Daly, S. & Wice, N. 1995 *Alt. culture*, =1997 吉岡正明訳『オルタ・カルチャー』リプロポート
- Downes, David 1966 *The delinquent solution: a study in subcultural theory*, Routledge & Kegan Paul
- Fischer, Claude 1975 Toward a subcultural theory of urbanism, =1983 「アーバニズムの下位文化理論に向けて」奥田道大・広田康生編訳『都市の理論のために』多賀出版
- Gelder, Ken (ed.) 2005 *The subcultures reader (second edition)*, Routledge
- Gelder, K. & Thornton, S. (eds.) 1997 *The subcultures reader*, Routledge
- Gordon, Milton 1947 The concept of the sub-culture and its application, → Arnold, David (ed.) 1970 *Subcultures*, The Glendessary press
- 1964 *Assimilation in American life*, =2000 倉田和四生・山本剛郎編訳『アメリカンライフにおける同化理論の諸相：人種・宗教および出身国の役割』晃洋書房
- 橋本治 1987「サブカルチャーの不思議」『思想の科学』88
- 日高恒太朗 2006「「族」にみる戦後六〇年」『(別冊歴史読本29) 戦後社会風俗史データファイル』新人物往来社
- Jenks, Chris 2005 *Subculture: the fragmentation of the social*, Sage
- 陣野俊史 2006『フランス暴動：移民法とラップ・フランス』河出書房新社
- Kadrey, Richard 1993 *Covert culture sourcebook*, St. Martin's press
- Kidd, Warren 2002 *Culture and identity*, Palgrave
- 馬淵公介 1989『「族」たちの戦後史』三省堂
- 前島賢士 2001「銀行員の職務犯罪：銀行業界の業界下位文化と犯罪」『犯罪社会学研究』26
- 宮台真司編 2005『サブカル真論』ウエイツ
- 宮沢章夫 2006『東京大学「80年代地下文化論」講義』白夜書房
- 難波功士 2005「「族」から「系」へ」『関西学院大学社会学部紀要』98
- 成実弘至 2000「日本サブカルチャー試論」『ウォーク』36
- 小川博司 1999「現代日本のサブカルチャーとは何か：支配的価値観の揺らぎのなかで」『月刊民放』29-9
- 奥村隆 1998『他者という技法：コミュニケーションの社会学』日本評論社
- 大月隆寛 1999「サブカルチャーの来歴：真に責任ある文化をつくるために」『月刊民放』29-9
- Schouten, J. & McAlexander, J. 1995 Subcultures of consumption: an ethnography of the new bikers, *Journal of consumer research*, 22-1
- 高田昭彦 1994「サブカルチャーとネットワーク」庄司興吉・矢澤修次郎編『知とモダニティの社会学』東京大学出版会
- Thornton, Sarah 1995 *Club cultures: music, media and subcultural capital*, Polity press
- Weinzierl, R. & Muggleton, D. 2003 What is 'post-subcultural studies' anyway?', Muggleton, D. & Weinzierl, R. (eds.) *The post-subcultures reader*, Berg
- Wilson, Brian 2006 *Fight, flight, or chill: subcultures, youth, and rave into the twenty-first century*, McGill-Queen's University press
- 山口優 1996『「テクノ」とサブカルチャー』『モンドコンピュータ』アスキー出版局
- Yinger, Milton 1960 Contraculture and subculture, *American sociological review* 25-5

## Notes on the Status of the Concept, “Subculture”

### ABSTRACT

The term ‘subculture’ has been used with many different meanings. Especially in Japanese, the loan word ‘sabukaru (tya)’ has been used in various ways. It has ordinarily referred to works, such as popular music, comics, animation films, programmes or magazines for the youth, video-games, and the latest fashions. Using Raymond William’s definition that culture is a whole way of life, subcultures means a subset of practices in each society. From the point of view what culture was supposed to be against the term ‘sub-’ culture, I try to classify the uses of subculture into four groups. 1) Subculture as an antonym of high culture, i.e. subculture as low culture. 2) Subculture as an antonym of total culture, i.e. subculture as partial culture. 3) Subculture as an antonym of main or dominant culture, i.e. subculture as alternative or counter culture. 4) Subculture as an antonym of conventional culture. I have chosen the last definition. I think when a certain subculture emerges, conventional culture, which is opposed to the subculture, makes its appearance a posteriori. Not until a certain subculture emerges and it reflects an aspect of our social conventions, are we aware of some “taken-for-granted-ness” which all of us hold in our everyday life. And furthermore, now we are living in a world where we cannot easily assume a definite high, total, or main culture. Therefore, we should not reify any high, total, or main culture a priori.

**Key Words:** subculture, unconventionality, cultural studies